

海軍軍人・高木惣吉の前半生

——近代日本における立身出世の一事例——

溝口 然

(玉井研究会 4年)

序 章

- I 高木惣吉の少年時代
 - 1 貧困家庭での出生
 - 2 尋常・高等小学校の思い出
 - 3 『西国立志編』との出会い
 - II 高木惣吉の青年時代
 - 1 中学講義録と独学
 - 2 上京と日本力行会
 - 3 海軍兵学校への挑戦
 - III 海軍兵学校合格とその後
- 結 語

序 章

昭和20(1945)年8月、日本は有史以来未曾有の混乱のなかにあった。それは、昭和16年12月8日の真珠湾攻撃によって開始された太平洋戦争を、どのように終戦に導くかという大きな問題に直面していたからである。宮中、政府、陸軍、海軍等の関係者が終戦工作に奔走することになるが、その中で忘れてはならない存在として注目されるのが「海軍良識派」の鬼才、逸材とも言われた高木惣吉である。

高木惣吉は、大正4(1915)年に海軍兵学校(第43期)を卒業後、一等駆逐艦「帆

風」航海長等を経て、昭和2（1927）年に第25期海大甲種学生を首席で卒業した。昭和2年から昭和4年にかけて在フランス日本大使館附海軍駐在武官附補佐官、昭和5年に海軍省副官兼海軍大臣秘書官を務めた。昭和11年に海軍省出仕で臨時調査課に勤務し、昭和12年、海軍大佐に昇進する。昭和14年、調査課長、海軍大学校教官等を経て、昭和15年に再び、調査課長を務めた¹⁾。調査課長となってから、日本海軍の進むべき指針を求めて京都大学の西田幾多郎博士と接触を深め、民間の知識人を集めてプレントラストを設けて思想・外交・政治を研究した。昭和18年に海軍少将に昇進、昭和19年に教育局長、昭和19年9月、戦局の悪化にともない井上成美海軍次官の密命を受け、病氣と称して終戦工作に従事し、米内光政海相を補佐した。

敗戦後の昭和20年9月から10月にかけて、東久邇宮内閣において、初代内閣副書記官長（現在の内閣官房副長官に相当）として敗戦処理にも当たった。高木は、政界・財界・学会などに構築した華麗な人脈を駆使し、海軍の「政治的アンテナ」²⁾の役割を果たし、「軍人政治家的存在として政界と密接な関係を持ち続けた」³⁾人物であった。また、自身の見聞・活動を記録した著書として『山本五十六と米内光政』（文藝春秋社、昭和25年）『太平洋海戦史』（岩波書店、昭和24年）『私観太平洋戦争』（文藝春秋社、昭和44年）、『自伝的海軍始末記』（光人社、昭和46年）など多数の著書を発表し、雑誌においてたびたび連載を持つなど軍事評論家としても活躍した⁴⁾。

さらに、彼が残した膨大な日記や意見書は、伊藤隆『昭和史断章』（東京大学出版会、昭和56年）、工藤美知尋『日本海軍と太平洋戦争』（南窓社、昭和57年）、野村実『太平洋戦争と日本軍部』（山川出版社、昭和58年）等で引用されてきた。特に、昭和12年1月から昭和20年12月23日までの高木の日記とその間に綴られた意見書は、伊藤隆編『高木惣吉 日記と情報』（みすず書房、平成12年）として刊行され、海軍研究や昭和史研究に利用されている。また、高木の活動を論じたものとして、兵頭徹「海軍省調査課と囑託の役割 高木惣吉と大学校研究部」（『東洋研究』、平成19年）工藤美知尋『東条英機暗殺計画——「高木惣吉資料」にみる日本海軍の終戦工作』（PHP研究所、昭和61年）、瀬戸厚『日本海軍の終戦工作』（中央公論社、平成8年）、川越重男『かくて、太平洋戦争は終わった』（PHP研究所、平成17年）、樋口秀実「終戦史の『戦後』——高木惣吉の終戦工作と戦後構想」（『軍事史学』、平成12年）、玉木寛輝『昭和期政軍関係の模索と総力戦構想戦前・戦中の陸海軍・知識人の葛藤』（慶應義塾大学出版会、令和2年）等の先行研究がある。これらの

先行研究は、膨大な高木の資料を駆使することによって、高木惣吉が太平洋戦争の終結に果たした役割を詳細に分析している点において極めて重要なものである。しかし、こうした「海軍軍人としての高木惣吉」に光が当てられている一方で、彼が小学校卒業のみの学歴であったにもかかわらず、独学によって海軍兵学校に合格し、エリート軍人の道を切り開いた特異な青少年時代に注目されることはあまりない。高木の伝記として、藤岡泰州『海軍少将高木惣吉語録』（光人社、昭和63年）や渋谷敦『積乱雲』（熊本日日新聞社、平成12年）、平瀬努『ソキチ高木惣吉伝』（熊日出版、平成17年）などで明らかにされている事実は多いが、高木の回想や文章をそのまま事実・真実として追認する傾向にあり、高木の前半生について客観的な視点や時代的な背景との連関の中で言及されているものは少ない。

そこで、本稿は先行研究・伝記を上記のように把握したうえで、高木惣吉の出生から海軍兵学校に合格するまでを、同時代の青年が追求した立身出世の過程と捉える時、彼の前半生はどのように位置づけられるか、あるいは彼が立身出世を目指す場合においていかなる問題が顕現したのか、さらにそれをいかに解決したのか、あるいは解決しようと試みたのかについて、当時の社会的背景や教育制度も踏まえて検討したい。かかる検証をもとに彼の立身出世の成功要因とあわせて近代日本にとってそれがどのような意味・意義をもつのかを明らかにしていきたい。

I 高木惣吉の少年時代

本章では、高木惣吉の生い立ちや少年時代を過ごした人吉での生活について見ていきたい。

1 貧困家庭での出生

本節では、高木惣吉の生い立ちについて、一族のルーツや家庭環境を中心に明らかにする。

高木惣吉は、明治26年8月19日（戸籍上は11月10日）、熊本県球磨郡西瀬村大字西浦1994番地⁵⁾に生まれた。父・鶴吉が25歳、母・サヨが24歳のときである⁶⁾。惣吉の父方の祖父にあたる惣作は、八代郡宮原の地で長女・シモを亡くした悲しみによる大酒の影響で早死にしたため、妻・ツル（惣吉の祖母）は、4人の子と長女の遺児・惣八を連れて実家のある八代郡宮地村に移り住んだ⁷⁾。その後、明

治12 (1879) 年8月に宮地村の親戚、相談役と話し合いの上、八代の上流である人吉に居を移した⁸⁾。一家が移り住んだ人吉は、九州山地に囲まれた人吉盆地に位置し、鎌倉時代から明治の廃藩置県までの約700年間にわたり相良氏が一貫して統治し続けた歴史を持つ小都市である。当時の人吉は、日清・日露の両戦役前後に最も多くの移住者を迎えており、その様子は「他郷の人々の移住が土地を求め業を興し、本郡資本主義のリーダーとなり、併せて産業・経済・文化の発達に貢献し、開拓地的気分を醸した」⁹⁾と記されている。惣吉が生まれた明治26 (1893) 年当時、高木家は、父鶴吉、母サヨ、祖母ツル、父の亡姉の遺児・惣八 (11歳年上)、惣吉の5人暮らしであった¹⁰⁾。一家が住んだのは「亀が淵」と呼ばれる地域である。ここは、かつて人吉を治めた相良藩で起きた「お下の乱」¹¹⁾で殺された人々を埋めた場所とされ、人々が近寄ることを恐れる場所であった¹²⁾。家は、北向きの8畳1間に3尺2間の板の間に納戸があり、8畳間は天井も葺かれていない粗末なものだったという¹³⁾。部屋につづいて形ばかりの囲炉裏と四畳半ほどの土間があり、炊事用の台所は建物から離れた溪流のそばに設けられ、その下手の吹きさらしの中に廁があった¹⁴⁾。一家は、父・鶴吉が村の巡査の所有する裏山の山番と山間のわずかな田畑の小作、農閑期には籠を担いで街に物売りで得るわずかな稼ぎで生活していた¹⁵⁾。鶴吉は内気で無口、消極的な性格ながら、惣吉が幼少の頃までは温良で真面目な働き者だった。しかし、父である惣作同様に30歳になる手前から焼酎に溺れ出し、アルコール中毒となって、惣吉が海軍兵学校に在学中の大正2年に46歳で亡くなってしまふ¹⁶⁾。母・サヨは、人吉で農業を営む石田家の次女として生まれた。気性の勝った気風の良い人柄であり、男勝りの力持ちだったという¹⁷⁾。サヨは鶴吉と結婚する前、一女を生んで前夫と離婚をしていたため、家長的存在であった祖母・ツルは、初婚の鶴吉とサヨの結婚を認めようとせず、入籍を拒み続けた。これにより惣吉の出生届は2カ月近く遅れることとなった¹⁸⁾。祖母・ツルの嫁いびりの鬼姑ぶりは、幼いころの惣吉の記憶に深く残っているようで、後年以下のよう語っている。

「私の一番古い記憶の一つは、そば降る雨の庭先を、戸口に佇む母の懷に抱かれて眺めていた情景で、水溜りに散った桃の花びらが鮮やかに浮かんでいた。今にして想像すると、二度の結婚とも相手を見損ない、姑には嫌われ、産後の大病で体が弱り、母は父と別れて去るべきか、どうすべきか、思い煩い、悩みに悩んだ春雨のある日だったのではなかったろうか。私は男の子な

ので、置いていかねばならない。おいていけば継母の手に委ねることになろう。去って実家に戻るとしても、そこは継母と異母妹たちの住まいであれば、自分には茨の座での辛抱が待っているだけである。切羽詰まった母の心情が以心伝心に私に伝わって、水溜りに浮かぶ桃の花びらの情景を私の脳裏に刻みつけたのではあるまいか。人の記憶は間違いやすい。成人してからの記憶はとくにそうである。しかし、幼い時から晩年まで確かなものとして変わらない記憶は、或いは事実と違っていたとしても、本人としては真の思い出なのである」¹⁹⁾

両親ともに無学文盲で、父は惣吉の教育に無関心だったが、母は、耳学問によって得た知識なのか、牛若・弁慶の五条の橋の勝負、牛若東下り、夜盗熊坂長範討伐、源平一ノ谷、那須与一の扇的、能登守教経の矢、岩見重太郎の佛退治、大江山の鬼退治、荒木又右衛門の伊賀仇討ち、清正公の虎退治、木村又藏の怪力ぶり、西南戦争の官軍の人吉城攻めなどの物語や童話をよく話聞かせた²⁰⁾。母親との思い出については、前述のように多く書き綴っているのに対して、父親を偲んだ筆跡はただの一行も見出すことはできない²¹⁾。藤岡は、想像を絶するような苦難の道乗り越えてきた惣吉には、「微塵の妥協も許さぬ一種の怨念めいた気質がある」²²⁾と指摘する。小学校時代に同級生から言われた言葉を晩年まで恨み続け、海軍軍人となった後でも自分の生い立ちを見せないためか、静江夫人²³⁾を伴って故郷に帰ることは一切なかった。また自身については、1歳になっても口が開けず、3歳になるまで従兄惣八の背中でドン・ドン・パタ・パタを繰り返していたことから「一種の身障児だったように思う」²⁴⁾と述べ、「大人になっても喋るのが苦手で、原稿を持たないと短い話でも不安なのは、やはり生来、言語中枢に欠陥があるためだったかもしれない」という。また、自身の鼻が人よりも大きいというコンプレックスを抱えており、「そのコンプレックスは生涯執念深くつきまとい、私をして女性に対する極端な臆病者にしてしまった」²⁵⁾と回想している。貧乏、父親のアルコール中毒、険悪な嫁姑関係、自身のコンプレックスとこれ以上ないと思えるほどの貧しさであり過酷な生活環境であった。

以上のように惣吉は、エリートとは程遠い家庭に生まれ育ち、決して恵まれた環境とは言えない幼少期を過ごした。しかし、明治という時代は、能力があれば立身出世を望むことができる時代であり、惣吉はその恩恵を多分に受けることによって海軍エリートとしての道を進んでいくことになる。

2 尋常・高等小学校の思い出

本節では、惣吉がどのような学生時代を送ったのかについて、近代日本の教育制度と照らしながら述べる。

明治33 (1900) 年4月、惣吉は満6歳7カ月で西瀬尋常小学校²⁶⁾に入学した。当時の教育制度では、尋常小学校4年は義務教育とされ、原則すべての国民が通うことになっていた。明治新政府は明治5 (1872) 年の「学制」実施当初から「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん」²⁷⁾ことを目標に近代教育制度を整えていく。しかし当時の日本の社会は、このような近代学校制度を受け入れるには種々の障害があった。学校を設立維持するための経費の負担は当時の貧困な民衆の生活にとってあまりにも大きく、また教育の新しい考え方や内容に対しても伝統的な思想や社会意識からの強い抵抗があったことから、就学率は学制発布の翌6年において男女平均28.1%にすぎず、明治10年時点においても39.9%にとどまっていた²⁸⁾。

近代日本の義務教育制度の歴史にとって大きな転換点となるのは、明治33年の小学校令の全面改正 (第3次小学校令) である。この小学校令の制度上の改革によって、修業年限の統一や高等小学校設置の奨励、保護者による就業義務の明確化、授業料の廃止が実現した。なかでも保護者による就業義務の明確化、授業料の廃止は、それまで低迷していた就学率を一気に高めた。就業義務の明確化については、「学齡児童保護者ハ就学ノ始期ヨリ其ノ終期ニ至ル迄学齡児童ヲ就学セシムルノ義務ヲ負フ」と定め、その「保護者」についても規定を明確にし、「学齡児童保護者ト称スルハ学齡児童ニ対シ親権ヲ行フ者又ハ親権ヲ行フ者ナキトキハ其ノ後见人ヲ謂フ」と定めることで就学義務について責任の所在を明確にしたのである。義務就学の規定の明確化とともに、この小学校令において特に注目すべきは、公立小学校においては原則として授業料を廃止し、義務教育の無償制を確立したことである。「市町村立尋常小学校ニ於テハ授業料ヲ徴収スルコトヲ得ス」と規定し、特別の事情により授業料を徴収する場合には府県知事の認可を受けなければならないと定めた。それ以前は授業料を徴収することが原則であり、当時の地方財政の窮乏との関連から授業料が増額され、これが就学を妨げる重大な原因となっていた。そのため授業料の廃止と義務教育費の国庫補助は当時の教育関係者等の強い要望となっていた。このような状況のもとに、右の小学校令においてはじめて授業料廃止の原則が立てられたのである。また、日清戦争後の近

代産業の発達に伴う国民生活の向上や教育に対する認識が深まったことも影響し、明治20年の時点で45%にとどまっていた就学率は、明治38年には約96%に達した²⁹⁾。惣吉もこのように教育制度が整っていくなかで学校に通えるようになった1人であろう。両親共に無学で文盲の貧しい家に生まれた惣吉は、本来学校に通うことができなかつた可能性も十分にあった。しかし、近代日本は義務教育の普及によってあらゆる国民が教育を受けることができる体制を整えることで、結果的に惣吉のような人材を登用するシステムを構築したのである。

こうした制度のなかで教育の機会を得ることができた惣吉だが、彼が過ごした尋常小学校での日々は彼のその後の人生にどのような影響を与えたのであろうか。惣吉が尋常小学校で直面したのは、差別意識と人生への疑問であった。惣吉は、自身の尋常小学校時代のことを「意気地なしの泣き虫」であり「悪童どもに苛められ、侮辱された恨みだけが残っている」³⁰⁾と述べている。親のことや貧乏で賤しい生活ぶりを大勢の前でぶちまけられ、集落の集団登校をボイコットされるなどの仕打ちを受けたという。惣吉にとってこのような尋常小学校の頃の印象は強烈で、「こんな差別観念の強い田舎など誰が住んでやるか、という気持ちがあとになって東京に飛び出した有力な原因になった」³¹⁾という。また、この頃は父・鶴吉の深酒が激しくなった時期でもあった。正気の時はずつむきがちで、母の説教に反対もできぬ気の弱い父が、酔うとプレーキの毀れた自動車のように暴走して警官や他人に絡む悪い癖が治らなかった。酒屋で酔った父を迎えに行く時、惣吉自身の屈辱感は昂じ、憂鬱で考え込む傾向が増した³²⁾。「もともとしゃべることは不得手だった」ことに加え、「内向性に拍車をかけられた結果となった」という³³⁾。学校ではいじめられ、家では酒に溺れる父という環境のなかで、将来の生活について漠然とした不安におびえるようになっていった。惣吉は「16、17歳になって人生問題に突き当たるのは一般に珍しくないが、私は5、6年早すぎたように思う」³⁴⁾と回想するように比較的早い時期に自身の生い立ちや家庭環境は惣吉にとって逆境となっていた。そうした状況下にあった惣吉ではあったが、学方面では非凡なものを発揮する。西瀬尋常小学校に所蔵されている学籍簿には、生年月日、住所、入学年月日（明治33年4月4日）、卒業・退学年月日（明治36年3月26日）、退学の理由（卒業）、3、4年の修了年月日、出席日数といった基本情報に加え、保護者の情報として、父・高木鶴吉の氏名と住所、職業（平民）が記載されている。また、3、4年の学業成績として、修身、国語、算術、体操の4科目と操行（素行）すべての科目でオール「甲」を修めていることが記載され

ている。惣吉自身、「西瀬尋常小学校の頃に習った教科書がどんなものであったかは全く思い出せないが学校の勉強が難しいとか厭だなどと思ったことは一度もなかった」³⁵⁾という。また、「読んだり書いたり先生の問いに答えたりでは、誰にも負けなかった。」³⁶⁾とも回想している。さらに、尋常小学校入学から「二月ばかりで二学年に編入」³⁷⁾するいわゆる「飛び級」をしている。前述の学籍簿において、第1学年、第2学年の学業成績欄が空白になっているが、これは彼が飛び級していたことを裏付けている。

また、西瀬尋常小学校では良き理解者との出会いもあった。昭和50(1975)年、西瀬小学校百周年記念の際に作成された記念文集に惣吉は「思い出」と題する一文を寄稿している³⁸⁾。この中では、大学総長よりも威厳のある八字ひげの二代竹内猪三郎先生、美男で話し上手の三代西川弥吉校長、入学して2年に編入されるまでの担任だった若く美しい愛甲先生の3人が登場する。入学時の校長であった竹内校長からは「記憶に残る訓話を聞いたことがない」一方で、西川校長からは「歴史の中の面白い逸話をたくさん聞かせてもらった」と好意的に述べている。また、惣吉が17歳で上京を決心し、西川校長に助言を求めた際には「まあそれは大変に難しいことだ。千人に一人ぐらい運よく成功するだろう」と「定石どおりの確かな見通しを答えられた」エピソードに言及しており、惣吉は尋常小学校を卒業した後も西川校長に進路の相談をしていた。両親が無学で文盲であった惣吉にとって進路を相談できる西川校長は貴重な存在であった。

以上、惣吉が尋常小学校で送った日々について、当時の教育制度と照らし合わせながら論じた。惣吉が尋常小学校での日々を過ごした明治30年代は、日本が日清戦争に勝利し、近代国家への道をさらに加速化させる中で、教育制度が急速に整備され、いかに貧しい家庭であっても義務教育を受けることができるようになったことは、惣吉にとって非常に重要な意味を持った。極貧家庭に生を受けた惣吉でも小学校に就学し、教育を受けることで立身出世の道を歩む最初の一步を踏み出すことができたのであった。西瀬尋常小学校での惣吉は周囲からのいじめや侮辱、父のアルコール中毒などの困難に直面しながらも、優秀な成績を修め、のちの立身出世につながる基礎を形成した。この基礎は、次節で述べる出会いによって発展へとつながっていく。

3 『西国立志編』との出会い

本節では、惣吉の立身出世のきっかけともいえる読書について、特に惣吉のバ

イブルとなり、その後の進路に大きな影響を与えた『西国立志編』について紹介したい。

明治36年、惣吉は西瀬尋常小学校を卒業後、人吉高等小学校³⁹⁾に入学する。高等小学校は明治19年の小学校令公布当初は修業年限4年と定められていたが、その後、「2年、3年または4年」と定められた⁴⁰⁾。義務教育は尋常小学校のみであったが、明治40年の義務教育期間の延長の影響もあり、明治31年においては尋常小学校卒業者の65%が高等学校に進学している⁴¹⁾。さらに、明治28年から38年の10年間には高等小学校卒業者は年平均1万人ずつも増えた。当時の高等小学校卒業者の半分以上は就職や家業を継ぐなどしたが、2年修業で中学受験資格が得られるため、2年終了時に中学へ進む者もいた。惣吉が入学した人吉高等小学校は、人吉球磨地域の市町村組合によって合同で設置され、下球磨地域の各学校から学生たちが集まっていた⁴²⁾。入学当初は、小学生らしく、釣り、水泳などに勤しむ日々を送っていたようである⁴³⁾。惣吉の場合は、2年修了時にも中学進学へのあてはなかったため、格段勉強するような意識はまだなかった。

しかし、同級生で首席だった深野時之助⁴⁴⁾が熊本中学へ進むと⁴⁵⁾、自身の将来に関する疑問が湧き、その解明を読書に求めていく。藤岡は「惣吉にそなわっていた天賦の才は、この読書によってグングンと開花していく」⁴⁶⁾と指摘しているとおり、読書は、惣吉のその後の人生の方針を指し示す羅針盤のような役割を果たすことになる。しかし、読書欲に目覚めた惣吉ではあったが、彼には自由に本を買う経済的な余裕はない。そこで始めたのが書店での立ち読みだった。当時人吉には「岩本文具店」⁴⁷⁾という文房具店があり、雑誌と少しばかりの新刊書を取り扱っていた。惣吉は、毎日のように、休日には朝から夕方まで立ち読みを続けていたが、人吉で1番の美人と評判だった店番の若夫人⁴⁸⁾はただの1度も厭味や小言を言ったことがなかったという⁴⁹⁾。読書の方法を教えてくれる人もない惣吉の読書法はただ盲滅法の乱読であったが、「岩本文具店の美しい若夫人の好意でこのように人並み以上の読書ができた恩恵を忘れることはできない」⁵⁰⁾と回想している。惣吉の死後、遺志により出身である西瀬小学校に150万円の寄付が行われ高木文庫が設置された(図1)際には、この若夫人の写真を文庫の上に飾ってもらうように特に手配したというエピソードが示すとおり(図2)、惣吉にとってこの若夫人はまさに「恩人」であった⁵¹⁾。

岩本文具店の立ち読みで読んだのは、新渡戸稲造の『ファウスト物語』や安倍磯雄の『理想の人』、尾崎紅葉の『金色夜叉』や徳富蘆花の『寄生木』などであっ

図1 人吉市立西瀬小学校の高木文庫



図2 高木文庫に設置されている岩本ユイの肖像



た。また、『成功』や『少年』といった当時の少年雑誌の懸賞募集にたびたび応募し、そこで得た賞金で本を買うなどしていたという⁵²⁾。雑誌『成功』は、明治35(1902)年に創刊され、修養欄、受験欄、海外活動欄を設け、政界、教育界、文壇名士、軍人、実業家など幅広い寄稿者を得ていた⁵³⁾。読者は主に東京に遊学するか、もしくは何らかの形で働きながら勉強しようとする青年であった。また、雑誌『少年』は、時事新報社が明治36(1903)年に発行を始めた少年向け雑誌であり、懸賞論文や懸賞考物といった企画が行われていた。惣吉もこうした懸賞に応募をしていた1人であった。明治39年10月号の懸賞考物には、与えられた1コマ(少年が道角で衝突する直前)をもとに「2コマ目、3コマ目を考えよ」という課題において(図3)、二等賞として「熊本県球磨郡西瀬村 高木惣吉」と入賞した記録が残っている⁵⁴⁾(図4)。

このように周囲の支えや自身の努力によって出会った本の中で最も感銘を受け、バイブルとしたのが中村正直訳の『西国立志編』(サミュエル・スマイルズ著)であった。「天は自ら助くるものを助く」という信念を思想的根幹とした教訓と、その実例とされる歴史上の人物300数人の成功談を説いたものであり、明治初年の新時勢における有志の青年層を発奮させて、その指針とされた書である。貧しい生まれでも忍耐と努力で一業を達成し、国家の発展に寄与することができるという生き方指南本であり⁵⁵⁾、福澤諭吉の『学問のすゝめ』とともに、圧倒的な支持を受けて読まれ続けた。日本における発行部数は100万部を超えるとも言われ、原書が発行された英国の25万部を遥かに超える人気を集めた⁵⁶⁾。

図3 『少年』第36号



(時事新報社、明治39年19月) 93頁

図4 『少年』第37号



(時事新報社、明治39年10月) 96頁

『西国立志編』や『学問のすゝめ』のベストセラー化が示すように明治の前半期は、立身出世の倫理が称揚され、称揚された倫理を実現することによって「出世」が現実になるという時代であった。また、こうした個人の立身出世がそのまま国家レベルの立身出世（富国強兵＝列強への仲間入り）と重なるという、いわば「立身出世の至福期」であった⁵⁷⁾。

この「立身出世」熱は、初め士族の子弟の間で沸騰したものであったが、明治後半期には徐々に庶民の間にも浸透していく。しかし、そうした立身出世への情熱をもった上昇移動志望者の増大は皮肉なことに上昇市場を圧迫させた。惣吉が『西国立志編』を読み大いに勇気づけられた明治30年代は、立身出世熱が底辺一般庶民に浸透する一方で、それを維持することが困難になった時代でもある⁵⁸⁾。

惣吉がこの事実直面するのはもう少し後のことだが、『西国立志編』は、惣吉を大いに勇気づけ精神的支柱となった。この『西国立志編』について高木は後年、「民主的自由思想を授けてくれ、私の人間形成に深く影響を与えてくれたの

はこの一書による」とし、その影響について以下のように述べている。

「一読、再読、三読して、世には貧困、逆境、卑賤、非才にして倦まず、弛まず努力すれば、『天は自ら助る者を助く』という諺どおりに立志伝中の人となった者の多いことを知り、大いに勇気を与えられた。これによって自分は己の境遇や不運を忘れ、海外の偉人や、往古の英雄と接することの喜びをおぼえ、手当たり次第に伝記類を読み漁るようになった。」⁵⁹⁾

貧しい家庭に生まれ、学校に通えないながらも独学で学び、水力紡績機を発明したリチャード・アークライト、ごく普通の日雇い労働者階級からハワイ諸島など数多くの島々を発見した海洋探検家のキャプテン・クック、独学で読み書きを学び、仕立屋からアメリカ大統領になったアンドリュー・ジョンソンといった西国立志編で紹介される偉人達のエピソードは、貧しく恵まれない家庭で育った惣吉に努力次第で立身出世の可能性があるという道を示し、これから押し寄せる様々な困難を乗り越えさせる原動力となった。

以上、惣吉の読書欲の芽生えとその過程で特に影響を与えた『西国立志編』と立身出世ブームについて論じてきた。惣吉がバイブルとした『西国立志編』は、明治初期の立身出世ブームの火付け役ともいえるべき書であり、惣吉を含め多くの若者を発奮させた。しかし、こうした立身出世ブームによる上昇移動志望者の増大は皮肉なことに上昇市場を圧迫させ、維持が困難な状況に陥ることになり、惣吉をはじめとする若者たちは大きな苦難に直面することになる。

II 高木惣吉の青年時代

本章では高木惣吉の青年時代について、彼がどのように学び、将来を切り開くに至ったかについて見ていきたい。またそれに関連して、当時の社会的な背景についても明らかにしていく。

1 中学講義録と独学

本節では、惣吉の高等小学校卒業後の進路をめぐる出来事について、その要因となる当時の社会的背景に言及しながら論じていく。

明治40(1907)年3月、惣吉は人吉高等小学校を首席で卒業した。この当時高

等小学校を卒業した場合、中学校に進学することが正系ルートとされていた。中学校を卒業すると高等学校や大学予科、軍学校への進学が可能となる。しかし、中学への進学は容易なことではなかった。中学進学率は、大正8年ごろでさえ、尋常小学校卒男子の5～6%程度と極めて少なく、ごく一部の人間に限られたエリートコースであった⁶⁰⁾。さらに惣吉が住む人吉には中学校がなかったため、惣吉が中学に進む場合は、遠く離れた熊本中学に進学しなければならない。人吉から熊本中学に通うことはできず、下宿生活をしなければならないことから中学進学は「留学」と称せられており、多額の費用を要した。父が焼酎に溺れる高木家にはとても出せる額ではない。この時代、まれに篤志家などの後援を得られる場合もあったが、高等小学校の同級生たちが師範学校や熊本中学へ進む中、後援者もみつからず惣吉は進学の道を閉ざされた。

このように惣吉が学生時代を送った明治30年以降、義務教育ではない高等小学校の入学者・卒業者が急増したことは先に述べたが、同時に高等小学校卒業生で中学校やその他の中等学校に進学しない者も増えていき、高等小学校卒業生の実に8割から9割が上級学校に進学できなかった。この現象は「高等小学校現象」⁶¹⁾と指摘されているように高等小学校を卒業しながらも、中学校には進学するあてのない若者たちが溢れていたのである。このように立身出世の「目標」を内面化させながらも、上級学校進学への「手段」を失う若者は決して珍しくなく、惣吉もまさに同じ壁に直面していたと考えられる。

人吉高等小学校を首席で卒業しながらも行き場を失っている惣吉に対し、学校後援会長の菊池淡水が郡書記の丸尾静に勤め先を紹介してもらうように手配し、丸尾から当時肥薩線鉄道建設工事出張所所長の福井文之助に口添えしてもらった結果、「肥薩線鉄道建設工事事務員」に採用された⁶²⁾。菊池淡水と丸尾静の2人は、元相良藩の藩士であり西南戦争の際には西郷側に人吉隊として参加、その後投獄されたが、帰郷した地元の名士である⁶³⁾。惣吉が採用された九州線鉄道建設工事事務所の仕事は当時建設が進められていた九州線（現在の肥薩線）⁶⁴⁾の工事監督が主で、専門学校出身の福井所長、次席の東大工科出身の佐藤三郎技師、中学出の技手3名、事務主任の山下靖志、下働きに電信係1人、給仕係1人と惣吉といったメンバーであった⁶⁵⁾。人吉近郊の工事は鉄橋架設と線路の土盛りが中心であり、事務主任の仕事は一般庶務の他は土盛り工事料の計算が大半だったという。15歳の惣吉は、ここで学歴の重要性を痛感する。惣吉は日給25銭、月になおして7円50銭で当時でさえ自立の食い扶持にも足らず、家計の足しにもならない程度

図5 『少年』第37号 広告



(時事新報社、明治39年10月)

普通文官講義録、尋常小学校教員受験講義録など幅広い領域で存在し、惣吉が読んでいた雑誌『少年』には、惣吉が購読した講義録の広告が掲載されていた⁶⁸⁾(図5)。

惣吉が購読していた中学講義録は、明治35年創設の大日本国民中学会発行のもので、駿河台に拠点をおき、会長を尾崎行雄、理事長を河野正義が務めていた。なかには会費だけ集めて倒産してしまう怪しい通信教育も多い中でこの大日本国民中学会の講義録は長期間にわたって繁栄した代表的な講義録とされている⁶⁹⁾。明治40年代で見ると、入会金が30銭、1カ月の会費が45銭～50銭であり、講義録は毎月2回送られ、30カ月で中学の全科目を修了する⁷⁰⁾。機関紙も送付され、そこには各種試験案内や評論、講話などが載せられていた⁷¹⁾。理事長の河野によれば、大正6年ごろには、会員数が30万人を超え、全国津々浦々に会員を有していたという⁷²⁾。大日本国民中学会講義録の広告では、「自宅に在りて業務の傍ら少額の学費と少き時間とを以て中学校の全科を修了せんとする人は本会に入会せよ」と謳い、期日までに申し込みを行うものには入会金を半減したり、特待生、優待生の特典があることなどの積極的な宣伝が行われていた(図5)。しかし、

であった⁶⁶⁾。一方、東大工学士の佐藤次席が40円、山下主任が18円であった⁶⁷⁾。小さな建設事務所でも、地位や俸給は学歴という資格の上に構成されているという現実と直面した惣吉の人生設計の基本はこのときに定まったのである。

しかし、学歴を得ようにも中学進学を断念した惣吉の経済事情から選択肢は限られていた。前述の通り、この時代は惣吉のように中学に進学したくても、資金も時間もない高等小学校卒業で溢れていた。そんな青年たちの受け皿となったのが中学校講義録などの通信教育による「独学」であった。

講義録は、明治18年の英吉利法律学校の講義録を皮切りに、中学講義録や

この講義録は現在の高等学校通信教育のように資格を伴っているものではなく、講義録を修了したところでいかなる公的資格も得られなかった。

このように、なぜ同時代の少年達は講義録をこぞって購読したのだろうか。竹内は2つの点を指摘している⁷³⁾。1つは、学歴／上昇移動のセンスを内面化しながら就学がかなわないフラストレーションされた心情の受け皿となったことである。中学講義録で勉強している間は、気分は中学生でありうる。または講義録によって上京の準備期間というように未来を担保にしながら当面の失意を消去する手段として講義録は少年たちの需要に応えた。もう1つは、明治36年の専検制度の制定である。専検に合格すると中学校卒業資格が得られ、専門学校や高等学校の受験資格ができるという現在の高等学校卒業程度認定試験に似た制度である。これにより、講義録には専検受験という明確な目標が設定されることになった。

こうした背景により、多くの高等小学校卒業者の需要を捉えた講義録であったが、惣吉の場合は少し動機が違った。彼の場合は、仮に専検に合格したとしてもその後の学費の成算がなかったため、大日本国民中学会が大々的に宣伝していた「購読終了時の試験成績優秀者は東京本部で面接の上、米国留学の特典を与える」という点に惹かれ、それを目標にしていた。惣吉は西国立志編でカーネギーやロックフェラーの成功談に触れた影響からか「ハワイか米本土に渡り、皿洗いでもしながら運命を開拓してみたい衝動にかられ」⁷⁴⁾ており、アメリカに渡ることによって人生の大逆転を信じていた。明治30～40年代にかけ、渡米が立志や成功と同義のように考えられ、実際に数多くの者が渡米した。また、渡米を奨励する数多くの本が出版され、渡米協会・力行会といった渡米奨励団体も活況を呈していた⁷⁵⁾。移民の最適地アメリカ、渡米すれば稼げて学べて洋行帰りとなれる、といったイメージが語られ、多くの人々の関心を引いたのである⁷⁶⁾。とりわけ、当時の成功ブームの中で、実力次第の機会と成功の社会アメリカといったイメージが特に日本で苦学に励む苦学生達の憧れとなっていた。惣吉も日本では学資の成算ができず、満たされぬ思いや息苦しさを抱える中で、「狭い日本に見切りをつけ」⁷⁷⁾自然とアメリカに立身出世の道を見出したと推測される。因みに、『暗黒日記』で知られる外交評論家の清沢洌も経済的その他の事情で中学に進学することができず、明治39年に渡米をした1人であった⁷⁸⁾。

しかし、講義録での独学は、聞こえはいいがいばらの道であった。第一に講義録での学習にはフィードバックがない。和文英訳の際には、自分の書いた英文のどこが間違っているのか確かめる術はなく、発音に至っては、単語にカタカナの

発音ルビが付いていてもアクションやイントネーションには及ばない。惣吉自身、西瀬尋常小学校の先生の家までノートを抱え発音を教えてもらいに行ったり、熊本中学の友人に英文で手紙を書いて直してもらったりと非常に苦労したという⁷⁹⁾。代数や幾何の応用問題が解けずに1題で1日も2日もかかった例も稀ではなかった。当時の勉強指南本でも朝4時から夜10時まで勉強することが説かれており、その難易度がうかがえる⁸⁰⁾。惣吉自身も講義録での独学の困難さについては次のように述べている。

「難問を抱えて球磨川べりの草原に頭を抱えながら、いくたび天を恨んだか。なぜ私は貧乏の家に生まれて、こうまで苦心しなければ中学程度の修学さえ許されないのだろう。これしきの問題さへ解けない自らの鈍才は、果たして苦労して勉強する資格があるのだろうか。わが生まれた星を恨み、わが才能の不足を託ち、わが容姿の醜さを悲しみ、憂鬱に沈むことが多くなった。その絶望感を払い除けるために『西国立志篇』を読み返し、また幼稚な感傷的感想を綴って自らを慰めた。」⁸¹⁾

明治41 (1908) 年10月ごろ、惣吉は鉄道建設事務所の移転に伴い辞職し、講義録の修業に向けて猛烈な独学体制に入る。講義録による学習期間は3年が基準であるため高等小学校卒業の3年後、つまり明治43年3月には、東京に出て面接を受けなければならない。仕事をやめ、背水の陣で1年半にわたる講義録での猛勉強の末、卒業の試験が「平均九十何点という優等の成績だった」との知らせを受け取り、次に東京での最終の面接試験にパスできれば太平洋の広大な自由の世界に行けると信じて、上京することになる。

以上のとおり本節では、中学進学を断念した惣吉が働きながらも学歴の重要性を認識し、講義録による「独学」に活路を見出したことを示した。講義録は、進学を目指しながらも様々な事情によって断念せざるを得ない苦学生たちの受け皿となっており、惣吉は、厳しい独学の日々を送りながらも講義録が宣伝した米国留学を目指して上京を果たすのである。

2 上京と日本力行会

本節では、惣吉の上京と海軍兵学校を目指すまでの経緯について明らかにする。明治43 (1910) 年、惣吉は講義録が触れ込んだ米国留学を目標に上京する。し

かし「刻々3年、規定の成績を収めたので、東京で最終審査にパスできたら渡米ができる、というので胸ふくらませて上京してみると、現実と宣伝とは大違いで、マンマと一杯食わされたことがわかった。」⁸²⁾とあるように、国民中学会が宣伝していた留学は誇大宣伝であったことがわかり、惣吉は同会の紹介で講義録の製本下請けをしている小川町の大出製本所で裁断工として働くことになる。そうした中、広告で渡米希望者の研修や苦学生の就職の相談斡旋をするという小石川駕籠町にある「日本力行会」が目にとまり、製本所をやめ、力行会に入会する⁸³⁾。この時代、立身出世ブームとその行き詰まりの狭間で苦しむ苦学生たちが、海外、特にアメリカに活路を見出していたことは先に述べた。惣吉が入会した日本力行会は、牧師の島貫兵^{しまぬきひょうだゆう}太夫によって設立された渡米支援団体であり、日本の苦学生に自活勉学の道を与えて救済する活動をしていた。島貫は「移民の神様」⁸⁴⁾とも評され、彼の名は、渡米や苦学といった単語と結びついて、広く日本社会に知られていた。また、彼が主催した日本力行会も、最盛期には会員数1万人を超え、会誌『力行世界』は、一般書店で販売され、公共交通機関の車内に吊り広告が出されていたという⁸⁵⁾。明治以降、特に日露戦争後に立身出世ブーム、成功ブームがあったことはすでに述べたが、島貫が出版した『成功の秘訣』(1892年)は、「成功を題名にした最も早い成功読本」⁸⁶⁾であり、当時の成功ブームの牽引者であった⁸⁷⁾。惣吉はここで、英語のリーディングとカンパセーション、あとは聖書講義で英語の初歩的発音から指導されたという⁸⁸⁾。

そうした状況下、惣吉は島貫に呼ばれ、帝大教授で天文台長の寺尾寿博士の書生を紹介された。寺尾博士は、東京物理学校(東京理科大学の前身)の創立委員であった。創立委員は、無月謝の学生を1名限り推薦できる権限を持っていたため、惣吉は無月謝学生として推薦され、入学する。東京物理学校は、入学試験は優しく入りやすいが、入学後の授業の進度ははやく、進級・卒業は難しい「入りやすく出にくい」⁸⁹⁾という評判の学校であり、卒業生の多くが教職にすすみ、特に中等教育界の数学・理科教員の重要な地位を占めていた。

寺尾博士宅での生活は、昼間は書生兼庭師兼買い出し係兼家庭教師という三役、四役を務め、物理学校の夜学に通うという忙しい日々であった。また、日曜は寺尾博士の母堂に連れられ、教会へ。寺尾博士の母堂は、故矢島楯子女史などと親交があり、月例の老人会には、故小崎弘道師がいつも招かれて説教され、後藤新平の母堂もその会員であった。寺尾母堂や島貫先生の影響で、惣吉は日曜ごとに当時の名士海老名弾正、植村正久、山室軍平諸師の説教を残らず聞いてまわり、

中村正直、新渡戸稲造、安部磯雄諸氏の著書にも親しんだ⁹⁰⁾。惣吉自身この機会を「ヤソかぶれの気味ではあったが、思想面では少しマせていたのだろう」⁹¹⁾と自嘲気味に回想するように、力行会の島貫をはじめ当時のキリスト教界の大物たちとの交流の機会を持つことになる。

元々、米国留学を目標に上京した惣吉であったが、この頃、アメリカで過激化する排日運動の影響で定められた日米紳士協定により米国に渡航することは制限されてしまっていた。また、父の酒癖がさらに悪化し、母を1人残して海外に行くことが難しくなった。こうした理由により米国留学の夢は消え去ってしまったが、物理学校入学を契機に惣吉の将来の選択肢は定まる。それは、学費を必要としない海軍兵学校を目指すことで、もし失敗した場合は、物理学校を卒業し、中学校の数学教師になることであった。昼間は書生兼庭師兼買い出し係兼家庭教師という四役、夜は物理学校に通うため、朝3時に起きて勉強時間を捻出するという過酷な受験勉強であった。通信講義録で3年独学、物理学校の夜学1年という「すこぶるあやしげな学力」⁹²⁾ではあったが、明治45年春、寺尾博士に保証人になってもらい海兵志望の願書を提出した。

以上、惣吉が上京して挫折を経験する一方で、彼をサポートした存在について論じた。特に日本力行会の島貫兵太夫は、当時の成功ブームの牽引者であり、苦学生達を多数支援していた。惣吉もそうした支援を受けることで寺尾博士の書生となり、東京物理学校での夜学の機会を得る。当初の目標であった米国留学は断念したが、学費を要さない軍学校への進学に活路を見出していったのである。

3 海軍兵学校への挑戦

本節では上京し寺尾寿東大博士の書生として勉学の日々にも励む惣吉が、海軍兵学校の受験に至る主要因について明らかにしていきたい。

惣吉が米国留学を断念し、物理学校入学を契機に軍学校への進学または物理学校を卒業し教師の道に進む計画へと舵をきったことは前節で述べた。惣吉が目標と定めた海軍兵学校は、当時22種類も存在していた軍学校のなかでも海軍将校養成を目的としたエリート校であり、旧制高校から帝国大学へと進むいわゆる「正系」と呼ばれる学歴ルートと並ぶ難関であった⁹³⁾。軍学校は、学費が一切かからない。そのため、経済的に恵まれない全国津々浦々の秀才を登用する軍将校養成コースとして青年達の社会的上昇と立身出世の意欲を満たす選択肢として機能した。

惣吉は、学費がかからない軍学校のうち、海軍兵学校を単独志願している。惣吉の記述によれば、「たいていの志願者は、陸士、海軍機関学校、あるいは海軍経理学校と連記志願」⁹⁴⁾していたというが、なぜ彼は海軍兵学校を単独志願していたのであろうか。惣吉はこの理由について、「性分で、海兵でも、海機でも、経校でも受かりさえすれば、という二道をかけることができなかつた」と述べているが⁹⁵⁾、そもそも陸軍士官学校の受験資格がなかつたことも海兵を受験した理由であると考えられる。陸軍士官学校は、明治36年に「陸軍補充条例」の改正が行われ、「中学校又ハ之ト同等以上ノ学校ヲ卒業」した者のみが入学資格を認められることとなった⁹⁶⁾。この影響で中学校を卒業していない惣吉は陸軍士官学校の受験資格さえ有していなかつたために、消去法的に海軍兵学校を受験したと推察される。また、惣吉が海兵の面接で志願理由を聞かれた際のエピソードについて、以下のように述べている。

「高木生徒は、どんな理由で本校を志願したのか？」

おおよそこんな下らぬ質問ほど答えにくいものはない。まさか海兵生徒のジャケットに短剣姿のカッコいいのにあこがれて（実際はそうだったが）ともいえないし、そうかといって、貧乏で高校へ行けないから（これも大いに事実だったが）とも答えられないし、海が好きで、立派な海軍将校になり、海国日本のために献身したいから、などという体裁のいいうそをついてしまった⁹⁷⁾。

惣吉が生まれ育った人吉は山に囲まれた盆地であり、海はない。惣吉には海への親しみがあつたわけでもなければ、軍人への接点があつたわけでもない。以上の記述からもわかるとおり、惣吉にとっては、学費の心配がなく、最高の教育を受けられることが最重要であつた。惣吉と同じく、独学で軍学校へ進学した例として渡辺錠太郎が挙げられる。渡辺は、小学校卒業後、養家の農業を手伝いながら、中学校に通っている友人から教科書を借りて独学で中学校課程を修得し、陸軍士官学校に合格した。渡辺が軍人を志望した理由は必ずしも憧れていたからではなく、養家が学費を出してくれるあてがなかつたからであつた⁹⁸⁾。

しかし、学費が必要ないとはいっても試験に受からなければ入学することはできない。海兵の試験科目には小学校では教科とされていない「物理、化学、地理、歴史、図画」が存在し、その程度も「尋常中学前科卒業の学力に批准す」と定め

られているなど、中学卒業者を前提とした選抜が行われていた⁹⁹⁾。そのため中学校卒業者ではなく、講義録による独学と物理学校の夜学しか経ていない惣吉にとっては不利な試験であった。また、このような科目の難易度もさることながら、競争倍率も非常に高かった。軍学校は毎年ほぼ5倍以上、特に、惣吉が海軍兵学校を受験した明治44年度は倍率が29.3倍に及ぶ難関試験であった¹⁰⁰⁾。

以上のように、軍学校のうち陸軍士官学校と海軍兵学校の2校は、軍将校養成コースとして大きな存在感を示しており、経済的な理由で進学ができない惣吉のような若者たちの立身出世の手段として有力な選択肢であった。しかし、惣吉が志望した海軍兵学校について示したとおり、その試験の難易度、競争倍率は非常に高く惣吉にとって人生最大の挑戦であった。

Ⅲ 海軍兵学校合格とその後

明治45 (1912) 年、惣吉は、100人中20番という上位の成績で倍率20倍を超える日本最難関の海軍兵学校に入校した¹⁰¹⁾。惣吉自身、「自分でも後になって、よくもあんな無鉄砲な勝負にでられたものと苦笑を禁じ得なかった¹⁰²⁾」や「マグレ¹⁰³⁾」と回想するとおり圧倒的なハンディキャップを乗り越えての合格であった。惣吉は、大正2年の海軍兵学校卒業後、海上勤務を経て、大正14年12月1日に海軍大学校甲種学生 (第25期) へと入学する。海軍大学校は、海軍において海軍士官に高等の学術を教授することを目的とした機関である。甲種、機関、選科、航海の中でもエリート養成の意味があったのは甲種学生であり、通常、海軍大学校、海大卒というときは甲種学生を指す。甲種学生は、高等兵学に関する学術を習得させるもので、入学資格は大尉任官後1年の海上勤務を経た者、通常は海兵卒業後約10年で海兵卒の15%が海大に入った¹⁰⁴⁾。惣吉は、この海軍大学校を首席で卒業し、恩賜の長剣を拝受する。このことについて「首席で恩賜の長剣を拝受することになると聞いて意外であった。妻は我がことのように喜んだが、私自身は海兵に入校した時ほどの感激はなかった。」¹⁰⁵⁾と述べているように、海大の首席卒業よりも海兵合格の方が惣吉にとっては人生最大の成功であり、快挙であった。

海大卒業後、惣吉は少佐任官、駐在武官としてフランスへ赴任する。その後、フランスから帰朝した惣吉は、昭和5 (1930) 年1月軍令部出仕兼海軍省出仕で軍縮会議事務、昭和5年6月海軍省副官兼海軍大臣秘書官として財部・安保・大

角各海相に仕えた。昭和6年2月に咯血、右肺尖炎、静養2カ年の宣告を受け、茅ヶ崎に転地療養し、病と闘ったのち、昭和8年4月に横須賀鎮守府人事部付として復帰した。昭和8年11月に中佐任官、海軍大学校教官（軍政担当）となり、昭和11年12月、臨時調査課課員兼軍務局局員、昭和12年10月25日に臨時調査課長に就任した。昭和14年11月、海軍大学校教官を経て、昭和15年11月、海軍省官房調査課長兼海軍省出仕（軍務局員）として海軍調査課に再び着任した。

昭和12年から17年にかけての海軍省官房調査課長または海軍大学校教官としての期間、政界や財界、学会など幅広く交流を活発化させ、その人脈を生かして民間の知識人を集めた海軍ブレイン＝トラストを結成した。昭和17年6月には、南方民政府総務局長の内命を受けるも健康診断の結果不適となり、舞鶴鎮守府参謀長に赴任する。昭和18年5月に少将任官、支那方面艦隊参謀副長の内命を受けるも、再び健康診断の結果不適となり、軍令部出仕を経て昭和19年3月1日に海軍省教育局長に就く。9月10日井上成美次官により終戦工作の命を受け、病気と称して教育局長を辞任した。軍令部出仕兼海大研究部員として終戦工作に奔走する中、終戦を迎えた。

以上、惣吉のキャリアで特筆すべきは、海上勤務が著しく少ない点にある。海上勤務は、海軍兵学校を卒業してから、海軍大学校に入学するまでの約10年間のみであり、戦争が始まってからも外地へ赴くことはなかった。これは、健康問題によるところが大きいと考えられる。海軍が政治的に消極的な姿勢であったとの指摘は従来から行われているとおりであるが¹⁰⁶⁾、その理由の一つとして、定期的な艦隊勤務のために、陸上での活動がたびたび中断され、対人折衝の機会が少ない点が挙げられている¹⁰⁷⁾。健康問題によって海上勤務が少ないことは、海軍軍人としては不本意とも言える経歴であったが、内地に止まり続けることは、結果的に惣吉に幅広い人脈を構築する機会を与え、そこから得られる情報を駆使し、異質なキャリアと活躍をすることができたと言えるだろう。

熊本人吉の貧しい家庭に生まれ、小学校のみの学歴から海軍少将に上り詰めるという、まさに立身出世の体現であった。

結 語

これまで惣吉の生い立ちから独学を経て海軍兵学校に合格するまでの過程について論じてきた。貧しい家庭に生まれ、最低限の初等教育しか受けることができな

かった惣吉がこのような立身出世を成功することができた要因はいかなるものであったのだろうか。第一は、明治の近代日本が人材登用の仕組みを比較的早い段階で整備していた点である。明治維新という大きな変化によって生まれた近代的な組織を運営していくために国民のあらゆる層から人材を登用する必要が生じ、学校や各種試験が整備された。惣吉のような貧しい家庭に生まれた子であっても、義務教育制度の普及により、授業の負担をすることなく、尋常小学校で学ぶことができた。また、経済的な理由で進学できない場合でも、学費のいらない軍学校という選択肢があり、試験にさえ合格すればエリートの道に進む可能性があった。惣吉自身も海軍兵学校の試験について次のように述べている。

「貧乏書生が恵まれた子弟と勝負するのは試験以外になく、とりわけ海兵のような学歴を度外視したフェアな学力テストは、海軍ならではの立派な伝統の一つだったと思っている。」¹⁰⁸⁾

惣吉の記述が示すように、家柄や出身に左右されず、試験によって公平に人材を選抜するシステムを近代日本が構築できたことは、国家の発展に重要な意味を持った。

第二は、「講義録」や「日本力行会」などの公教育や教育制度を補完する様々な仕組みが存在したことである。立身出世熱の過熱が、皮肉なことに成功機会を減少させ多くの苦学生や浪人が生まれてしまったことは前述のとおりだが、民間の取り組みとしてこうした苦学生や浪人生を支援する取り組みが誕生した。惣吉が受講していた大日本国民中学会の「講義録」は、「山間僻地」に教育を普及させることを目的にしており、経済的に進学を断念した地方の少年たちに教育の機会を提供した¹⁰⁹⁾。また、日本力行会は苦学生の渡米支援や教育を行うことで、その立身出世をサポートした。こうした取り組みは、ビジネスとして行われた側面もあるが、公教育や教育制度の理想と現実のギャップを補完する存在として機能したのである。

第三は、何より惣吉自身の強い意志と圧倒的な努力である。力行会の島貫は、多くの苦学生に職業を斡旋した経験から、苦学は100人に1人しかその初志を貫徹しないとまでいいきっていることがその困難さを示しているように、苦学は過労による病気や都会の様々な誘惑との戦いでもあった。後年、惣吉は自身の青春時代について「貧乏のハンディキャップを取り戻すため、私は一切の趣味と道楽

とから絶縁した」¹¹⁰⁾と述べているが、ただでさえハンディキャップをもつ惣吉が立身出世を果たすということは、それほどに過酷なことであった。いくら人材登用の仕組みが整備されていたとしても、誰でも立身出世を果たせるわけではない。高木惣吉の立身出世は、まさに『西国立志編』が説いている「天は自ら助るものを助く」という理念を体現したものであり、明治の立身出世主義のひとつのモデルケースであると言えるだろう。

- 1) 秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』（東京大学出版会、平成3年）224頁。
- 2) 黒澤良「内務官僚と二・二六事件後の政官関係」（『年報政治学』51巻、平成12年）。
- 3) 瀬戸厚「昭和期海軍と政局（1）「高木惣吉資料」の紹介と分析を中心として」（『政治経済史学』344号、平成7年）。
- 4) 渋谷敦『積乱雲 海軍少将高木惣吉』（熊本日日新聞社、平成12年）289-296頁。著書には、『終戦覚書』（弘文堂、昭和23年）、『太平洋戦争史』（岩波新書、昭和24年）、『聯合艦隊始末記』（文藝春秋社、昭和24年）、『山本五十六と米内光政』（文藝春秋社、昭和25年）、『日本の運命』（港出版合作社、昭和25年）、『軍事基地』（弘文堂、昭和26年）、『現代の戦争』（岩波新書、昭和31年）、『太平洋戦争と陸海軍の抗争』（経済往来社、昭和42年）、『私観太平洋戦争』（文藝春秋社、昭和44年）、『自伝的日本海軍始末記』（光人社、昭和46年）などがある。そのほか、雑誌『世界』（岩波）にて連載を行った。
- 5) 現在の人吉市矢黒町。
- 6) 藤岡泰州『海軍少将 高木惣吉語録』（光人社、昭和63年）23頁。
- 7) 平瀬努『ソキチ 高木惣吉伝』（熊日出版、平成17年）12頁。
- 8) 同上13頁。
- 9) 球磨郡教育支会『球磨郡誌』（球磨郡教育支会、昭和16年8月25日）212頁。
- 10) 前掲・渋谷著、14頁。
- 11) お下の乱は、寛永17年に田代半兵衛頼昌（犬童半兵衛）とその一族が屋敷に立て籠もり起こした動乱である（前掲・球磨郡教育支会、1435頁）。
- 12) 亀が淵はかつて相良藩のお下の乱で殺された121人の死骸全部を筏に乗せて運び、大きな穴を掘って埋めた場所とされている。7月7日の晩はこれらの亡霊が現れ出て、馬蹄の響きが聞こえるといわれていたという（同上、1436頁）。
- 13) 前掲・渋谷著、13頁。
- 14) 前掲・藤岡著、23頁。
- 15) 前掲・渋谷著、14頁。
- 16) 前掲・藤岡著、24頁。
- 17) 同上26頁。
- 18) 前掲・平瀬著、14頁。
- 19) 同上28頁。

- 20) 同上26頁。
- 21) 同上25頁。
- 22) 同上25頁。
- 23) 高木惣吉『山茶花の夢 高木静江闘病記』非売品。高木静江とは大正11年12月に結婚する。妻静江は明治33年6月3日、神奈川県鎌倉町雪ノ下606番地にて誕生。神奈川県師範学校附属小学校、高等科を経て、横須賀高等女学校卒業する。
- 24) 前掲・藤岡著、28頁。
- 25) 前掲・渋谷著、25頁。
- 26) 現在の人吉市立西瀬小学校。
- 27) 文部省『学制』（文部省、明治5年）6頁。
- 28) 文部省『学制百年史』（帝国地方行政学会、昭和47年）195頁。
- 29) 同上321頁。
- 30) 西瀬小学校『記念文集 西瀬小百周年』（昭和50年）16頁。
- 31) 前掲・藤岡著、25頁。
- 32) 同上25頁。
- 33) 同上25頁。
- 34) 同上25頁。
- 35) 同上25頁。
- 36) 同上25頁。
- 37) 前掲・西瀬小学校、16頁。
- 38) 同上16頁。
- 39) 前掲・球磨郡教育支会、413頁。人吉麓城内麓町にあり。明治13年郡立中学校を置き、同15年人吉学校と改称。同20年高等球磨小学校と変更、同25年法令改正により、人吉町外15カ村組合を以て、人吉高等小学校が組織される。同41年義務教育6カ年制度の実施と共に、就業年限3カ年の高等小学校として、大正4年3月31日まで存続、組合を解散し、廃校となる。
- 40) 前掲・文部省、309頁。
- 41) 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと野望』（世界思想社、平成17年）127頁。
- 42) 種元勝弘編『人吉市史 第二巻 上』（人吉市教育委員会、平成2年）188頁。
- 43) 前掲・藤岡著、47頁。
- 44) 松原慶治編『終戦時帝国陸軍全現役将校職務名鑑』（戦誌刊行会、昭和60年）1021頁、陸士27期。のち陸軍大佐、歩兵第84連隊長で終戦を迎える。
- 45) 前掲・藤岡著、51頁。
- 46) 同上49頁。
- 47) 現在の株式会社文尚堂。明治28年に印刷業を目的として人吉田町にて岩本覚治により創業。明治33年に文具業を人吉新町にて岩本兄弟活版所（基文堂）を設立。明治36年、人吉九日町68へ移転。<https://b-do1895.jp/company/history/>。
- 48) 岩本ユイ。大正5年、創業者である岩本覚治の逝去により代表に就任。<https://>

b-do1895.jp/company/history/。

- 49) 前掲・藤岡著、49頁。
- 50) 前掲・渋谷著、33頁。
- 51) 現在（2020年11月）も人吉市立西瀬小学校に設置されている高木文庫には、若夫人（岩本ユイ）の写真が飾られている。（図1、2）。
- 52) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記 続編』（光人社、昭和54年）8頁。
- 53) 樽澤玲「明治三十年代における立身出世論考—『成功』を中心に—」（『比較文学・文化論集』11巻、1995年）4頁。
- 54) 『少年』第37号（時事新報社、明治39年10月）96頁。
- 55) 竹内洋『立志・苦学・出世 受験生の社会史』（講談社、平成27年）38頁。
- 56) 三川智央「『西國立志編』と明治初期の「小説」観（Ⅰ）」（『人間社会環境研究』19巻、2010年3月19日）52頁。
- 57) 門脇厚司「立身出世の社会学」（『現代のエスプリ』118巻、至文堂、昭和51年）9頁。
- 58) 前掲・樽澤、3頁。
- 59) 前掲・藤岡著、50頁。
- 60) 伊藤隆監修、百瀬孝著『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』（吉川弘文館、平成2年）380頁。
- 61) 前掲・竹内『立志・苦学・出世 受験生の社会史』127頁。
- 62) 前掲・藤岡著、54頁。
- 63) 前掲・種元編、718頁、前掲・球磨郡教育支会、817頁。菊池淡水は、人吉二番隊の隊長として郡内各地で転戦したが、後、官軍に帰順し、さらに官軍に編入されて宮崎方面に従軍し、罪を免ぜられた。明治14年より郡書記、球磨郡会議員、県議会副議長、子爵相良家の家令を務める。丸尾静は、習教館に学び、同館教師となる。明治10年、人吉隊第一分隊長として熊本方面に戦う。官軍に帰順して懲役1年に処せられ、東京市ヶ谷監獄に服役、出獄後、郡書記となる。
- 64) 熊本産業遺産研究会『肥薩線の近代化遺産』（弦書房、2009年）170頁。
- 65) 前掲・藤岡著、55頁。
- 66) 同上55頁。
- 67) 同上55頁。
- 68) 『少年』第37号（時事新報社、明治39年10月）。
- 69) 前掲・竹内『立志・苦学・出世 受験生の社会史』140頁。
- 70) 同上140頁。
- 71) 同上140頁。
- 72) 河野正義『講義録による勉学法』（国民書院、大正6年）46頁。
- 73) 前掲・竹内『立志・苦学・出世 受験生の社会史』140頁。
- 74) 高木惣吉『自伝的日本海軍始末記』（光人社、昭和54年）17頁。
- 75) 立川健治「明治後半期の渡米熱—アメリカの流行」（『史林』69巻、昭和61年）383頁。

- 76) 同上383頁。
- 77) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記 続編』7頁。
- 78) 北岡伸一『清沢洌 外交評論の運命』(中公新書、平成16年)8頁。
- 79) 前掲・渋谷著、41頁。
- 80) 前掲・竹内『立身出世主義 近代日本のロマンと野望』136頁。
- 81) 前掲・渋谷著、42頁。
- 82) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記』17頁。
- 83) 前掲・藤岡著、70頁。
- 84) 「移民の神様の令嬢が南米の移民と結婚する」(『読売新聞』大正15年5月8日朝刊7面)。
- 85) 相沢一「島貫兵太夫と日本力行会—明治期日本キリスト教史の一側面としての『立身出世』試論—」(『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』、第1巻、平成28年3月)。
- 86) 竹内洋『日本人の出世観』(学文社、昭和53年)107頁。
- 87) 前掲・相沢、46頁。
- 88) 前掲・藤岡著、72頁。
- 89) 森野義男「物理学校を創設した建学の志士たち(4)」(『科学フォーラム』平成25年8月号)52頁。
- 90) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記 続編』8頁。
- 91) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記』18頁。
- 92) 同上15頁。
- 93) 斎藤利彦「軍学校への進学 明治後期中学校史の一断面」(『日本の教育史学』32巻、平成元年)31頁。
- 94) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記』15頁。
- 95) 同上15頁。
- 96) 前掲・斎藤、34頁。
- 97) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記』15頁。
- 98) 広田照幸『陸軍将校の教育社会史 立身出世と天皇制』(世織書房、平成9年)39頁。
- 99) 前掲・斎藤、35頁。
- 100) 同上43頁。
- 101) 前掲・秦、285頁。
秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』(東京大学出版会、平成3年)では、高木の海軍兵学校入学順位は20番、卒業順位28番と記されているが、藤岡泰州『海軍少将高木惣吉語録』(講談社、昭和63年)、渋谷敦『積乱雲 海軍少将高木惣吉』(熊本日日新聞社、平成12年)では、入学順位21番、卒業順位27番と記されている。
- 102) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記』15頁。
- 103) 前掲・西瀬小学校、16頁。
- 104) 前掲・伊藤、百瀬、364頁。

- 105) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記』71頁。
- 106) 手嶋泰伸『海軍将校たちの太平洋戦争』（吉川弘文館、平成26年）17頁。
- 107) 池田清『海軍と日本』（中央公論新社、昭和56年）140頁。
- 108) 前掲・藤岡著、83頁。
- 109) 前掲・竹内『立身出世主義 近代日本のロマンと野望』133頁。
- 110) 前掲・高木『自伝的日本海軍始末記』まえがき。

